

カラー作品 ■ テクニスコープ

ガラスの墓標

SERGE GAINSBOURG
JANE BIRKIN dans

CANNABIS

この愛、黄昏に崩れ去るのか！
残光にきらめく悲痛な青春を
鮮烈な凶弾が貫く――

セルジュ・ゲンスブル / ジェーン・バーキン
監督ピエール・コラルニック / フランス映画
日本ヘラルド映画





★解説

ニュー・シネマ運動は、いまやヨーロッパに影響をあたえている。この「ガラスの墓標」は、そのニュー・シネマの新鮮な息吹きとフランスのフィルム・ノワールの持つ伝統とが渾然と交りあつた話題の作品である。

フランスの麻薬組織を舞台に、殺し屋のセルジュという青年を通して、ガラスのように美しくもろい悲痛な青春を浮き彫りにした映画である。そして、セルジュを中心にポール、ジェーン、3人の愛は、いまの道徳律に對して、新しい愛のあり方「ラムール・リール（自由愛）」の典型を示している。その他、麻薬組織の暴力、殺人、密売、麻薬パーティなど興味深いものが暴露されている。

主演のセルジュ・ゲンスブールとジェーン・パーキンは、69年「ジュ・チーム・モワ・ノン・プリユ」というエロティックなシャンソンを吹き込んでセンセーションを呼んだ注目のふたりだ。彼らの共演は「スローガン」「カトマンズの恋人」がある。が、日本での公開ではこの「ガラスの墓標」が最初の本格的共演である。その他、ヨーロッパのポップ・シンガーとして有名なポール・ニコラス。これらの若手演技人に混じってクルト・ユルゲンス、ガブリエル・フェルゼッティなどが出演している。

監督のピエール・コラルニックは、TV出身で、本格的映画はこれが初めての新作である。そして、原作はフランスの推理作家F・S・ジルベールの「そして行ってしまった」である。

★物語

アメリカからパリへ向かう飛行機の中で、セルジュは大使の娘ジェーンと一緒にたつた。

殺し屋の彼はフランスに麻薬組織を持つファミリー一家の破壊を命じられた。

パリに着くと、彼はエメリー一家の殺し屋の出迎えを受け、危機一髪の所で逃れた。傷をなおさなければならぬ。一番安全な人間としてジェーンが浮んだ。電話をかけた。気づいた時は彼女のベットの中だった。こうして、セルジュはジェーンの家へ厄介になり、当然のように二人は愛の歡喜に酔いしれた。ある日、セルジュのアメリカでの相棒であったポールがジェーンの家へやって来た。ポールとセルジュは最高のコンビだった。そんな彼女を見て、ジェーンは悲しそうだった。

「もうすぐ傷は治るわ。そして彼と行ってしまうのね」ジェーンはセルジュに云った。傷が治ると、セルジュとポールはエメリー一家への攻撃を再開した。

パリのオペラ座で、エメリーの仲間たちが麻薬の売買をしている現場をおさえた。その売人を彼らは追った。そして、売人を締め上げて、麻薬工場を吐かせた。それはカンベールの養鶏場だった。

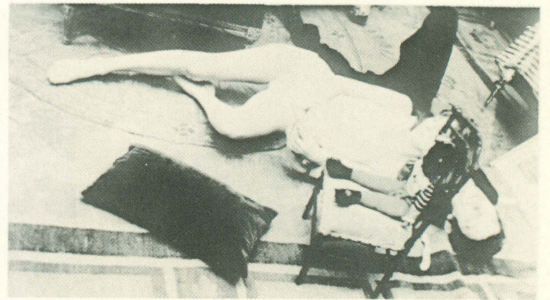
だが、セルジュの心の中は空虚だった。パリの仕事が終わりに近づいたからなのか、もっと他のことが原因なのかはセルジュ自身にもわからなかった。それらを忘れるかのようには、ジェーンを抱くのがだった。

カンベールの鶏小屋は爆発された。それはセルジュのエメリーに対する挑戦状であった。しかし、セルジュの心はますます虚ろになっていった。

「ポール！こんな一生を送りたくない。若い頃は良いと思ったが……」と、セルジュは云った。ポールはその決心がジェーンのためだとわかったとき、失意のどん底に落ちた。ポールはアメリカの本部にセルジュが足を洗ったがっていることを報告した。本部はポールにセルジュを殺すことを命じた。彼がやらなければ他の者を派遣する、と本部は無情だった。

ついに、エメリーとセルジュの対決がはじまった。ピストルが火を吹き、エメリーは殺された。

セルジュとジェーンは逃げた。あとからポールが追って来た。セルジュの拳銃がポールを狙った。だが、セルジュは撃てなかった。今度はポールがセルジュを狙った。涙を流しながらポールは引き金をひいた。この一瞬、すべてが沈黙した。



ガラスの墓標

CANNABIS

セルジュ・ゲンスブール/ジェーン・パーキン/ポール・ニコラス
監督 ピエール・コラルニック/音楽 セルジュ・ゲンスブール
フランス映画/サントラ盤・フィリップスレコード 日本ヘラルド映画



冷たい炎のような

ジェーン・パーキンという女

（アンアン編集部）今野雄二

ジェーン・パーキンという女優は胸もさうすいし、とびきりの美人でもないけれど、やたらに長い手脚と、何となくクールな雰囲気がある。どういふわけかエロティックで、良い感じがする。

全世界のファッション・マガジンやメンズ・マガジンのグラビアが、彼女の「カッコいい」肢体で飾られるようになったのは、ジェーン・チーム・モワ・ノン・プリユが大ヒットしたためである。これはジェーンが恋人のセルジュ・ゲンスブールの作った曲を、彼とデュエットしたものだ。

ちょうどそのころ、ジェーンとセルジュの二人がそろって主演する映画が撮影のまっ最中で、「Cannabis」という麻薬を意味するタイトルがつけられていた。マフィア・タイプのギャングのアクションを背景に、この「ジェーン・チームのアクションが激しい妖しいベド・シーン」を大胆にくりひろげながら、しかも美しい青春の抒情詩を歌いあげるといふものだった。そして言うまでもなく、この作品が日本でも公開されることになった。「ガラスの墓標」なのである。

その名前からもわかるように、ジェーン・パーキンはフランス人ではなく、イギリスの生まれである。一九四七年三月十四日に生まれたというが、早くも十八という若さで結婚しており、その相手が映画音楽のスター作曲家ジョン・バリーなのだった。

この結婚は二年後に終りに告げてしまったが、離婚の六ヶ月前にジェーンはケイトという女児を出産して、いまもおこの愛娘はジェーンが育てているのである。

女優志願のジェーンが端役のモデル役で出演したのがフランスのピエール・グリームプラという監督で、彼の作品「Slogan」でジェーンはセルジュ・ゲンスブールの相手役に抜擢された。この後、「May Morning」、「太陽が知っている」、「Top Petit Mon Amour」、「カトマンズの恋人」と次々にフランス映画で活躍しはじめた彼女は、その人気の高まるのと正比例するようにセルジュへの愛を深めていき、現在も、パリを中心にこのカップルの愛の生活はつづいている。